

# 弥生貝交易の中継地 鹿児島県高橋貝塚のゴホウラ分析から

The Takahashi Shell Mound in Kagoshima Pref.:  
A Relay Point in Neolithic Shell Trade Based on the Analysis  
of Strombus Shell Waste Fragments Excavated from the Site

木下尚子

KINOSHITA Naoko

はじめに

①高橋貝塚の層位と時期

②高橋貝塚におけるゴホウラ類の消費

③高橋貝塚におけるオオツタノハ・イモガイ消費

④貝輪からみた高橋貝塚登場の背景

⑤生産地・中継地・消費地の対応

⑥結語

## 【論文要旨】

本論は、弥生時代に沖縄諸島と北部九州を結んで継続した大型巻貝の交易（貝交易）の中継地として知られる高橋貝塚を対象に、遺跡に残された交易品（貝殻）の分析を通してその実態を具体的に描こうとするものである。

論の前半では、貝塚の5文化層の出土土器と、上下4層で実施した貝殻等の炭素14年代測定結果によって時間的な枠組みを確定し、これに基づき、出土したゴホウラ類（ゴホウラ・アツソデガイ）を分析して当地で行われた作業内容を復元し、時間的な変化を述べた。後半ではこれを同時期の沖縄諸島にのこる貝殻集積の出土遺物と対応させて、貝殻産地と中継地・消費地の関係を検討し、高橋貝塚を貝交易上に位置づけた。論の要点は以下の通りである。

- ・高橋貝塚は弥生前期中葉に始まり、同中期前葉まで継続した集落遺跡であり、琉球列島産の大型巻貝を用いた腕輪の各製作段階を示す貝殻187点が残されている。これらの9割以上はゴホウラ類である。
  - ・高橋貝塚人は当初から、沖縄貝塚人が作ったゴホウラの背面貝輪用粗加工品をもとに西北九州人のために背面貝輪を作り、さらにゴホウラ原貝から北部九州人のために腹面貝輪粗加工品を作り、これらを北の消費地に輸出していた。
  - ・高橋貝塚人は途中から背面貝輪製品とともに粗加工品も合わせて作るようになった。
  - ・腹面貝輪の製作では、ある段階で沖縄から粗加工品用の貝輪素材が届くようになり粗加工品生産の効率が上がるが、間もなく腹面貝輪粗加工品の生産拠点が高橋貝塚から沖縄に移り、高橋貝塚での腹面貝輪粗加工品の生産量は激減する。
  - ・腹面貝輪粗加工品が中継地を介さずに消費地に届くようになると貝交易における高橋貝塚の存在価値は低下し、遺跡は衰退する。
  - ・貝交易の中継地としての高橋貝塚の最大の特徴は、沖縄から届いた貝殻や貝輪素材を、製品化し、あるいは製品に一步近づける加工を行って消費地に届けるという、貝交易初期の経済的役割を果たした点である。
- 【キーワード】 高橋貝塚、中継地、貝交易、ゴホウラ類、弥生前期、沖縄諸島、貝殻集積

## はじめに

高橋貝塚は、弥生時代に沖縄諸島と北部九州を結んでおこなわれた貝交易の中継地として知られる。本稿は、この遺跡にのこされた交易品である大型巻貝の分析を通して、「中継」の具体的行為を復元しようとするものである。表題のゴホウラ類とは、ゴホウラ *Strombus latissimus*; *Strombus* (*Tricornis*) *latissimus* Linnae とアツソデガイ *Strombus thersites*; *Strombus* (*Tricornis*) *thersites* Swainson をいう<sup>(1)</sup>。

高橋貝塚は鹿児島県の薩摩半島西岸にある弥生時代前期から中期の生活跡である。遺跡は吹上砂丘の南端を流れる万之瀬川と支流の堀川周辺にひろがる標高11mの河岸段丘上にあり、現在は玉手神社の境内になっている(図1)。遺跡は1962年と1963年に、金峰町の委託をうけた河口貞徳氏が、社殿後背の貝塚部分を発掘調査し(図2)、成果を『考古学集刊』に報告したことで知られるようになった[河口1965]。

河口氏等による高橋貝塚の概要と特徴は以下のようにまとめられる：

- ・高橋貝塚は、北部九州の弥生文化が弥生前期前半に薩摩半島に伝わったことを示す南九州で最初の遺跡である[河口1965]
- ・高橋貝塚には、縄文時代以来の狩猟・漁撈・採集を行ないながら、水田稲作を受け入れた人々がいた[河口2005]
- ・高橋貝塚は、北部九州に運ばれた琉球列島産大型巻貝の中継地である[山崎1986]

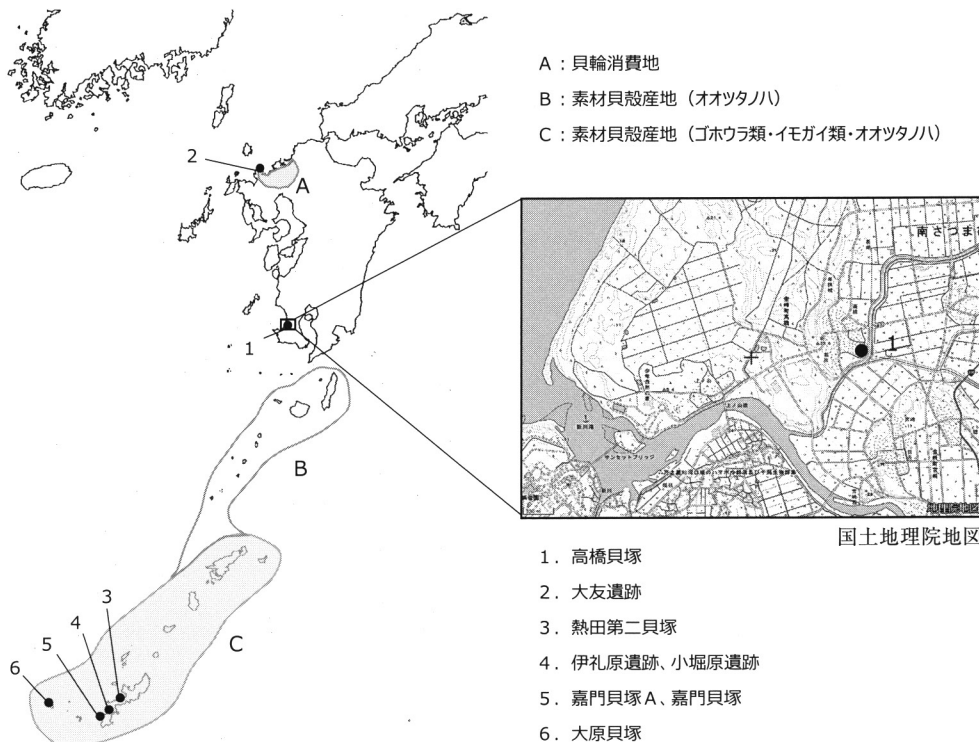


図1 高橋貝塚と貝交易関連図

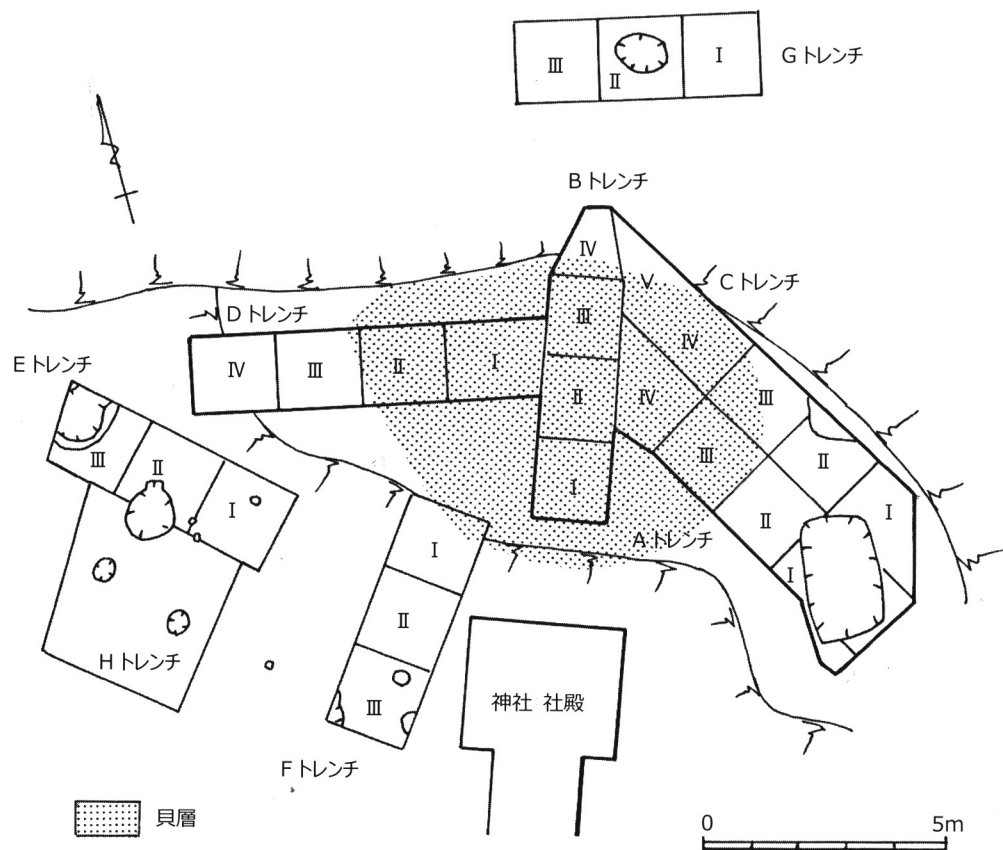


図2 高橋貝塚の発掘調査トレンチ配置図(河口2000第1図をもとに作成)

本稿は以上の三番目の特徴に注目し、高橋貝塚の遺物で実施した炭素14年代測定結果〔木下ほか、本誌報告編〕と、出土したゴホウラの調査所見、ならびに消費地と生産地に残る同時期のゴホウラ加工品をもとに、高橋貝塚で行われた交易品生産の内容を明らかにしようとするものである。

本稿で扱う弥生時代の時期区分と型式の対応は、山崎純男氏による型式ならびに藤尾慎一郎氏と設楽博己氏による編年に基づき、以下のようにする〔山崎1980、藤尾編2014b：pp.12-13〕。

弥生早期	：夜臼Ⅰ式，夜臼Ⅱa式
弥生前期	前葉：板付Ⅰ式，夜臼Ⅱb式
	中葉：板付Ⅱa式
	後葉：板付Ⅱb式，板付Ⅱc式

時期内小区分の表記については、Ⅰ時期を二分する場合は「前半・後半」を用い、三分する場合は「前葉・中葉・後葉」とする。

高橋貝塚の遺物等は現在、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されており、調査等には同センターの全面的な協力をいただいた。本研究は、科学研究費による共同研究「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」(課題番号18H05509 代表 国立歴史民俗博物館教授 藤尾慎一郎<sup>(2)</sup>)の一環である。

## ①……………高橋貝塚の層位と時期

### (1) 層位

高橋貝塚の堆積の特徴は、貝層を含む文化層が、一部を除いて基盤層上にほぼ水平に重なっている点にある(図3)。河口氏はこの「層序が確実」[河口2000:p.48]であることを重視して、発掘調査の35年後に高橋貝塚の土器型式について再検討を行っている。すなわち、全トレンチを通した層序をⅠ～Ⅵ層に整理して、出土した土器を逐一出土層にもどし、層位と土器の関係を確認したのである[河口2000]<sup>(3)</sup>。ただ氏が整理したⅠ～Ⅵ層と各トレンチの1～6層等の対応関係については個別の説明がなく、第三者には層どうしの具体的な対応が必ずしも明らかではない。しかし河口氏の示した図と説明内容、土器の注記、本文内の文言を付き合わせると、貝層を基準にその上の層と下の層、表土層と基盤層が対応することがわかり、この関係が明確なDトレンチが基準になっていることが理解できる。その対応を図3の下に示した。<sup>(5)</sup>

### (2) 土器と層位の関係

河口氏は1968年の最初の報告において、高橋貝塚で出土した北部九州系の土器を分類し、北部九州の型式との関係を以下のように示した。

高橋Ⅰ式<sup>(6)</sup>：板付Ⅰ式に対応<sup>(7)</sup>

高橋Ⅱ式：板付Ⅱ式に近い

この時点での分類は土器の形状によるもので層位との関係には触れられていない。河口氏が2000年に層位との関係で土器を再検討しているのは、その検証の意味もあるのだろう。その後北部九州の前期土器の編年研究が進展し、これをふまえて藤尾慎一郎氏は以下の時間的対応関係を指摘した[藤尾1993]<sup>(8)</sup>

高橋Ⅰ式：板付Ⅱa式に対応

高橋Ⅱ式：板付Ⅱb式から板付Ⅱc式に対応

図4は、河口氏による報告後、新たに作図されかつ出土グリッドと層位が土器の注記で確認できるものを取り上げ、河口氏の2000年の作業に習って層ごとに示したものである。以下、図4の土器について、Ⅴ層からⅠ層の順にみてゆこう。土器型式は[藤尾1990, 藤尾1993]によった。<sup>(9)</sup>

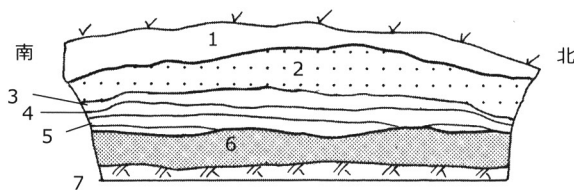
Ⅴ層には夜臼Ⅱ式の特徴をもつ壺(図4no.19, 以下19と表記)、夜臼Ⅱ式の甕(24, 25)、高橋Ⅰ式の甕(26, 27)がみられる。注目すべきはno.26の甕で、藤尾氏の西北九州型<sup>(10)</sup>に対応する[藤尾2001]。Ⅳ層では高橋Ⅰ式(15, 17)に加えて高橋Ⅱ式(16)が登場する。Ⅲ層では、奄美に特徴的な形状の土器(14, 仲原式土器)が出土していることが注意される。Ⅱ層では高橋Ⅰ式も残るが、高橋Ⅱ式(5, 6, 7, 9, 10)が多くなり、次の入来式に近い特徴をもつ6や7が登場する。Ⅰ層では瀬戸内地域の特徴をもつ甕(3)もみられる。なお同様の特徴をもつ口縁部は「BⅢ3」でも出土しており[河口2000:第7図の18]、瀬戸内地域との関係が早くもⅣ層の時期に存在していたことが知られる。



限られた資料からではあるが、以上から次のような時間の変化を読み取ることができる。

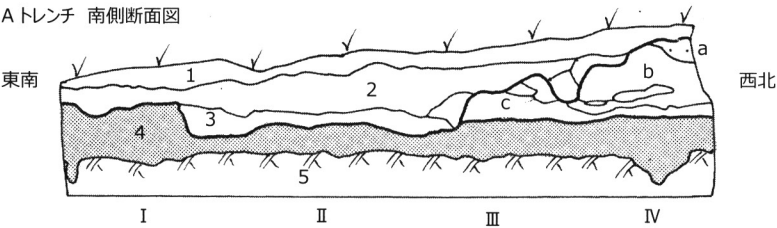
- V層：夜臼Ⅱ式，高橋Ⅰ式
- IV層：高橋Ⅰ式主体
- Ⅱ層：高橋Ⅱ式主体

Bトレンチ 西側断面図



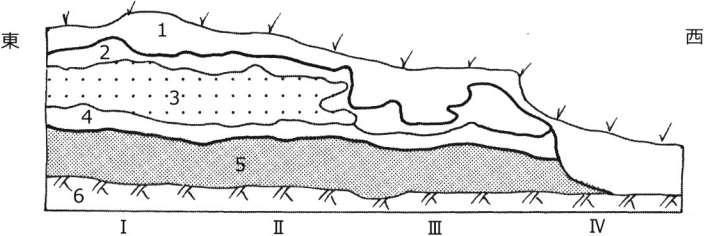
- 1 表層
- 2 貝層
- 3 混土貝層
- 4 粉貝含有黒土層
- 5 黄褐色微貝片砂層
- 6 黒色土層
- 7 黄褐色基層

Aトレンチ 南側断面図



- 1 表層
- 2 褐色土層
- 3 黝褐色土層
- 4 黒色土層
- 5 黄褐色基層
- a 微貝粉貝層
- b 混土貝層
- c 微貝粉混土貝層

Dトレンチ 南側断面図



- 1 表層
- 2 茶褐色混土貝層
- 3 貝層
- 4 黒色混土貝層
- 5 黒色土層
- 6 黄褐色基層

貝層 黒色土層

0 2m

グリッド間の層位の対応関係

河口総括層位	Bトレンチ層位	Aトレンチ層位	Dトレンチ層位
I：表土層	1	1	1
Ⅱ：混土貝層	なし	2, 3	2
Ⅲ：貝層	2	a	3
Ⅳ：混土貝層	3, 4, 5,	b, c	4
V：黒色土層	6	4	5
Ⅵ：黄褐色基層	7	5	6

図3 高橋貝塚の層位図(河口 1965 第4図をもとに作成)

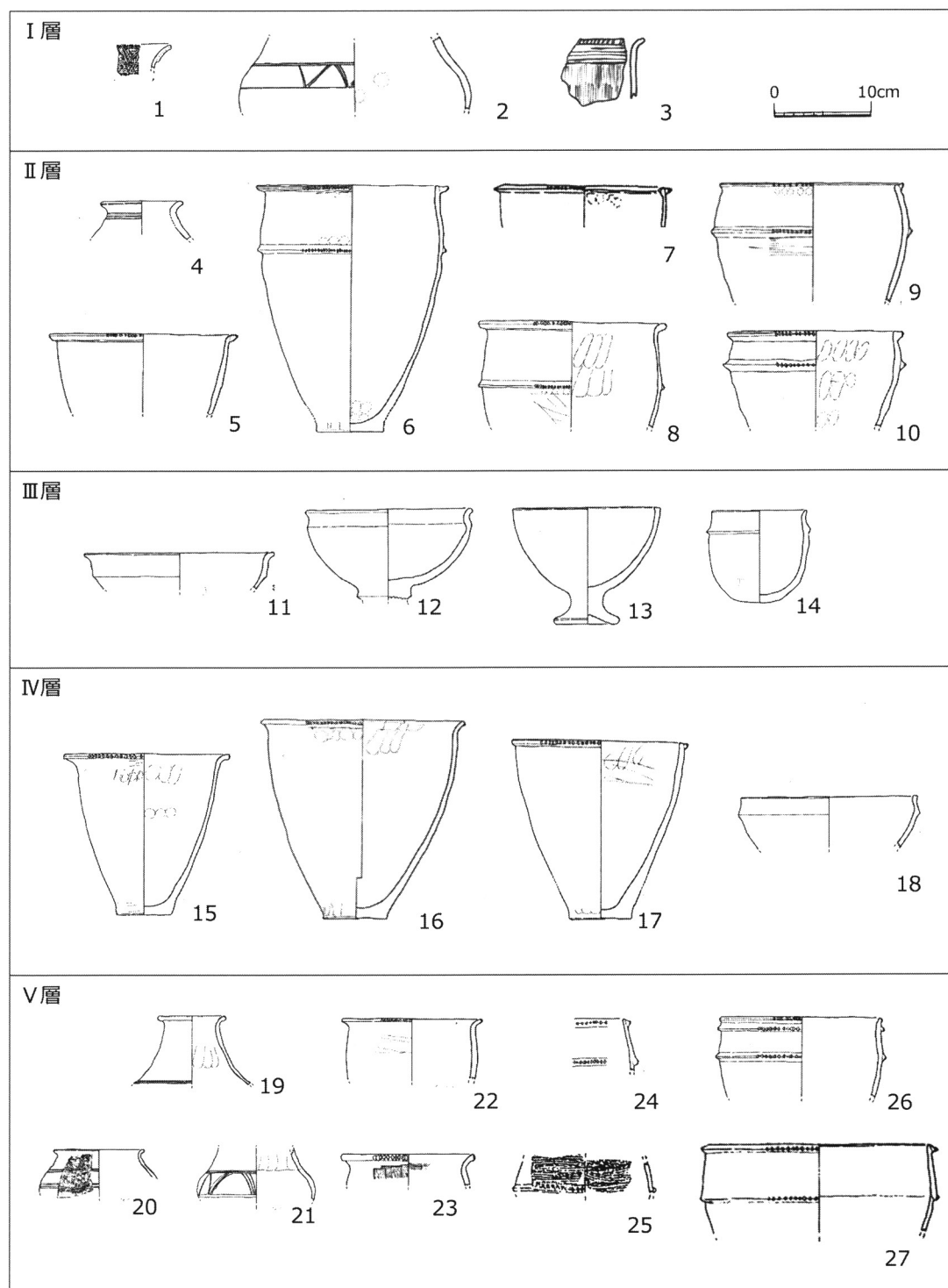


図 4(1) 高橋貝塚出土土器の層位別表示

1 : DⅣ 1	6 : DⅡ 2	11 : DⅡ 3	16 : DⅢ 4	21 : <u>BⅠ 6</u>	26 : DⅡ 5
2 : EⅢ 1	7 : DⅢ 2	12 : DⅠ 3	17 : DⅡ 4	22 : DⅠ 5	27 : DⅡ 5
3 : DⅣ 1	8 : DⅢ 2	13 : DⅠ 3	18 : BⅠ 4	23 : DⅠ 5	
4 : DⅣ 2	9 : DⅡ 2	14 : BⅠ 3	19 : DⅢ 5	24 : DⅡ 5	下線の層については 註(5) 参照
5 : DⅢ 2	10 : DⅣ 2	15 : DⅡ 4	20 : DⅠ 5	25 : <u>CⅠ 6</u>	

凡例:「DⅣ1」はDグリッドⅣ区の1層

図4(2) 土器の出土グリッドと層(土器の注記による)

V層からI層は無遺物層をはさまない一連の堆積層であり、土器型式も若干の重複を含みながら漸移的に変化しているので、これらは連続的な時間経過を反映するとみてよいだろう。「3層を境として、弥生前期の土器も新旧に区分することができるようである」[河口1965:p.87]とする河口氏の指摘をふまえると、高橋貝塚の時期と層位は以下のように整理できる。

V・Ⅳ層：高橋Ⅰ式の時期

Ⅲ層：高橋Ⅰ式から高橋Ⅱ式への移行期

Ⅱ・Ⅰ層：高橋Ⅱ式ならびにそれ以後の時期

### (3) 層位と炭素14年代

図5は、国立歴史民俗博物館の坂本稔氏と瀧上舞氏によって測定された各層にわたるゴホウラとイノシシ<sup>(11)</sup>の炭素14年代の結果である[木下・坂本・瀧上2022]。ゴホウラには海洋リザーバー効果を勘案した補正が行われている。層ごとのゴホウラとイノシシは、同じグリッド・地区の同一層で出土したものである。

図5の確率密度分布を見よう。Ⅰ層からⅣ層のゴホウラにはほとんど差がみられず紀元前400年前後に集まるのに対し、V層では紀元前500から450年にゆるやかなピークがあり、V層がやや古くなっている。イノシシでは確率密度分布のピークがゴホウラより分散しているが、Ⅱ層ではゴホウラと紀元前500から450年で重なる。Ⅳ層では紀元前600年前後でかろうじて重複するが、V層では紀元前550から700年前後でよりはっきりと重なっている。両者の確率分布密度が明確に重なる部分に注目してみると、以下のようになる。<sup>(12)</sup>

Ⅱ層：紀元前500から450年前後

V層：紀元前700から550年前後

一方、これまでに知られる土器の付着物による炭素14年代では、高橋Ⅰ式に対応するとされる板付Ⅱa式は700 cal BC 前後から600 cal BC 前後、高橋Ⅱ式に対応するとされる板付Ⅱb・Ⅱc式には550 cal BC 前後から380 cal BC 前後の年代が与えられている[藤尾2014]。表1は以上の関係を整理したものである。

高橋貝塚と北部九州の炭素14年代を比較すると、双方において数値の重なる部分が多いことから、高橋貝塚のV層とⅡ層の年代は、土器型式上の関係と整合的だといえよう。すなわち、高橋貝塚は紀元前7世紀中葉を前後する時期に始まり、紀元前5世紀前半ころまで継続的に存在したといえることができる。なお、遺跡では高橋Ⅱ式より新しい型式の高橋Ⅲ式、第1層から出土する高橋Ⅳ式が河口氏により報告されているので、遺跡としての下限は弥生中期にかかるものとみてよいだろう。

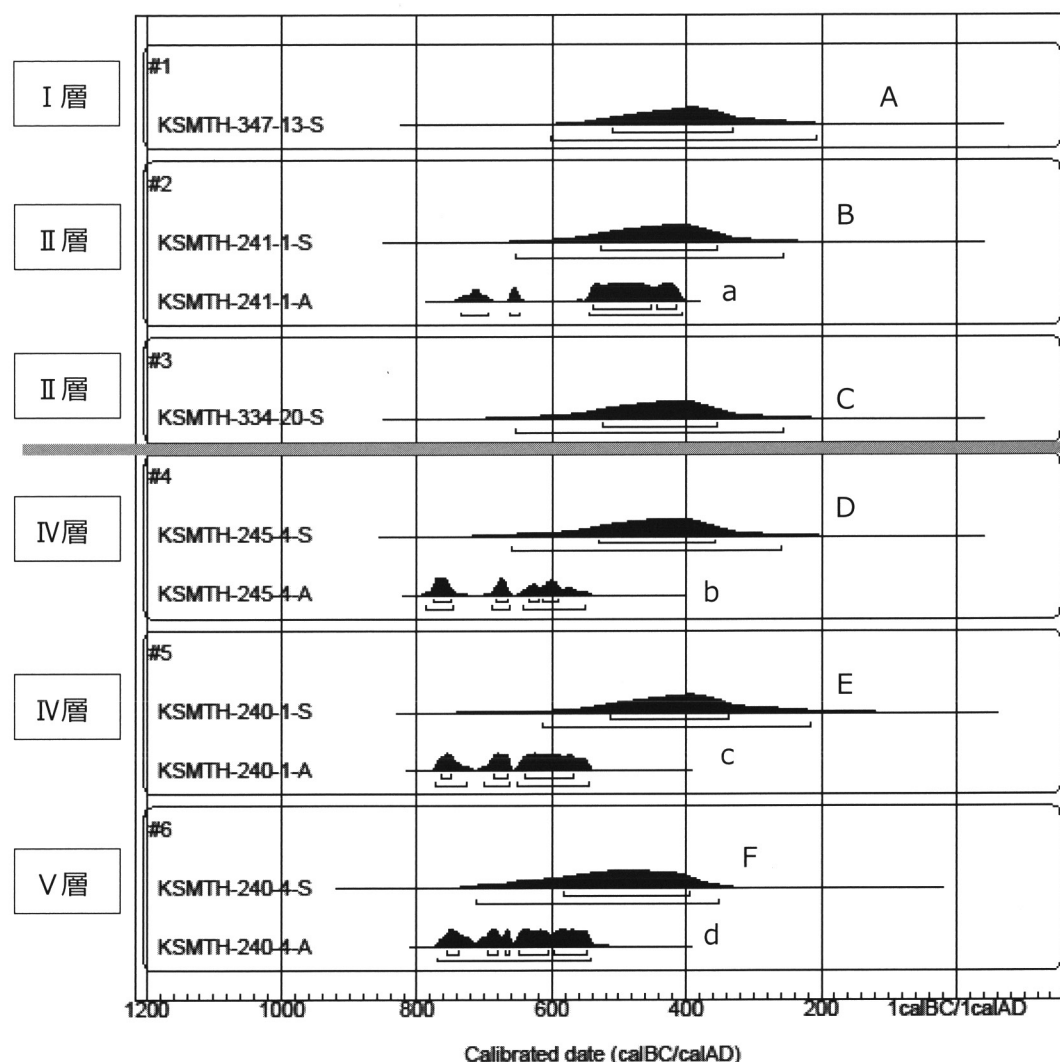


図5 高橋貝塚の貝殻・獣骨の較正年代の確率密度分布 (坂本稔氏による図に一部加筆)  
A~F: ゴホウラ類 a~d: イノシシ

表1 高橋貝塚と北部九州の較正年代・型式・時期

高橋貝塚の層序	高橋貝塚		北部九州		
	貝殻と獣骨の較正年代	主要な土器型式	対応する土器型式	土器付着炭化物の較正年代	時期
Ⅱ層	500 cal BC 前後から 450 cal BC 前後	高橋Ⅱ式	板付Ⅱb式	550 cal BC 前後から 380 cal BC 前後	弥生前期 後葉
V層	700 cal BC 前後から 550 cal BC 前後	高橋Ⅰ式	板付Ⅱa式	700 cal BC 前後から 600 cal BC 前後	弥生前期 中葉

## ②……………高橋貝塚におけるゴホウラ類の消費

### (1) ゴホウラ類・イモガイ類・オオツタノハの残存状況

高橋貝塚で出土している琉球列島産の大型巻貝には、ゴホウラ類（ゴホウラ、アツソデガイ）、イモガイ類（アンボンクロザメ、クロフモドキ）、オオツタノハがあり、これらは弥生時代の西北九州沿岸部ならびに北部九州平野部で消費された貝類を網羅している。出土数ではゴホウラ類が177点で全体の9割強を占め、残りがオオツタノハとイモガイ類で、オオツタノハが8点、イモガイ類はわずか2点である。

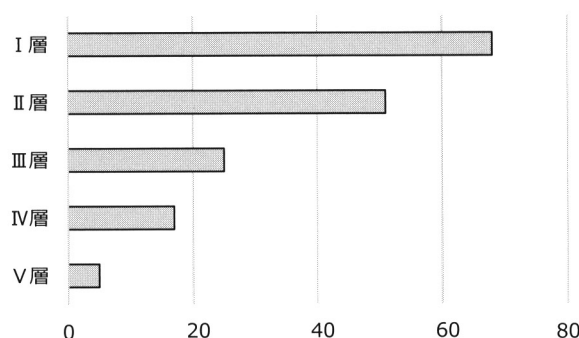


図6 高橋貝塚のゴホウラ類層別出土数 (n:166)

### (2) ゴホウラ類の消費

今回、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されているゴホウラ類等をすべて実見し、現生の貝殻と出土した貝殻破片を比較して、貝殻の部位を確認しながら一覧表を作成した。図6はこれらのうち、出土層の明らかなもの166点について層別の出土数を示したものである。ゴホウラ類の残存数が時期とともに増加していることがわかる。

高橋貝塚のゴホウラ類には、貝輪完成品（以下「完成品」）とその未成品、これらの製作の過程で打ち割られ廃棄された加工廃材（以下「廃材」）の3種類<sup>(15)</sup>がある。代表的なものを図7に示した。完成品や、その未成品の形状から、高橋貝塚では背面貝輪（ゴホウラ類背面を使った貝輪）と腹面貝輪（ゴホウラ類腹面を使った貝輪）が作られていたことがわかる（図8下段のAとB）。

ところで、筆者はゴホウラ類の腕輪の製作について、産地である沖縄に残る貝殻集積を分析して、以下の加工段階の存在を指摘した〔木下2017〕。

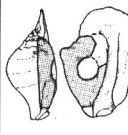

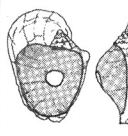
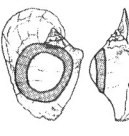
原貝 ⇒ 貝輪素材 ⇒ 貝輪粗加工品 ⇒ 貝輪完成品

原貝とは加工されていない自然形状の貝殻をさし、貝輪素材（以下「素材」）は粗加工品の製作のために敲打による簡単な加工を施したものを言う。貝輪粗加工品（以下「粗加工品」）とは加工が完成品に近いところまで進んだ段階のもので、この形状から完成品の形を特定できる加工品を言う。これらの段階は、背面貝輪にも腹面貝輪にも同様にみられ、さらにそれぞれについて素材や粗加工品の段階で加工が中断され、輸出品となっているものがある。高橋貝塚の時期には沖縄ですでに貝殻集積が登場しており、沖縄と高橋貝塚が無関係であったとは考え難いので、高橋貝塚の貝殻についてもこの加工段階に対応した整理をおこなった。

表2は、高橋貝塚のゴホウラ類177点を上記の段階に対応させたものである。表ではこれらを腹面貝輪と背面貝輪に分けて加工段階別の模式図を付し、それぞれの出土数を示した。表の下欄の数

値から、廃材が大多数を占めること、高橋貝塚には加工段階前半の原貝と素材が残っていないことがわかる。粗加工品や完成品は貝殻1個体から1点しか得られないが、廃材は作り方、調査現場での回収方法、数え方によっておそらく無限に増加する。廃材の数値が粗加工品数に比べて突出し

表2 高橋貝塚出土の加工段階別ゴホウラ類・廃材の出土数

ゴホウラ類	原貝	貝輪素材	貝輪粗加工品	貝輪完成品	加工廃材
腹面貝輪					
腹面貝輪					
出土点数	—	—	13	8	156
%	—	—	7%	5%	88%

\* トーン部分が出土品の形状を示す

て多い事実を、高橋貝塚でゴホウラ類が実際に加工されたことを示す根拠として理解しておこう。

高橋貝塚にはゴホウラ類の原貝がない。遺跡近海にゴホウラ類は生息していないので、これらは全て遺跡外から搬入されたとみてよい。粗加工品は高橋貝塚で原貝から作られた可能性もあるが、同時期の沖縄ではすでに高橋貝塚の粗加工品に対応するゴホウラ類の素材が腹面貝輪用・背面貝輪用ともに出土しているので、高橋貝塚人がこれらの素材を入手し、これをもとに粗加工品を作っていた可能性もある。一連の搬入品が遺跡に残っていないのは、そのほとんどが粗加工品になっているからであろう。

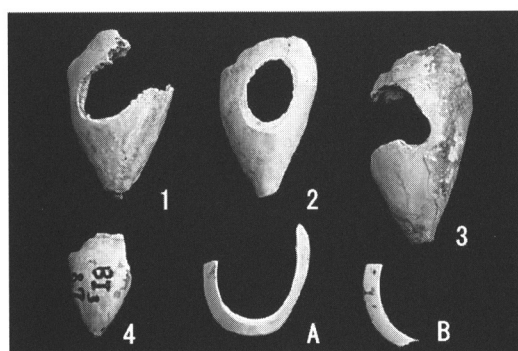
### (3) ゴホウラ類加工廃材の分析

高橋貝塚のゴホウラ類の加工廃材156点を貝殻の部位によって分けると、外唇、上唇、背面、一大結節（以下「突起」と表記）、腹面、内唇、殻軸の7部位になる（図8上段のa～g）。図9は貝殻の残存部位を層ごとに示したものである。ゴホウラ類の外唇と上唇が各層を通してもっともよく打ち落とされていることがわかる。以下、除去された部位の意味を検討しよう。

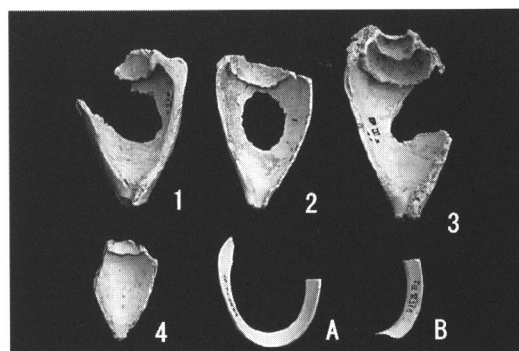
ゴホウラ類の外唇はゴホウラ類の貝殻でもっとも分厚い部分である。腹面貝輪ではまったく使われないが、背面貝輪では一部使われる。ただその場合も貝輪の厚さを均等にするために外唇の腹面側は打ち落とされている。したがって外唇はすべての貝輪に対して不要な部分を含み、この破片が各層でもっとも多いのは理解しやすい。

上唇の廃材が意味するところはやや複雑である。高橋貝塚に時期的に対応する腹面貝輪は、現在知られる限り金隈型貝輪のみであり、これは上唇を残す形状なので（図16-14・15参照）、高橋貝塚人が金隈型貝輪用の粗加工品を製作していたならば上唇は除去されず、その廃材の存在はそのまま背面貝輪用の加工とする理解に繋がる。気になるのは高橋貝塚に残されている粗加工品がすべて上唇を欠いている点である（図7の1～3）。こうした失敗品では、上唇は廃材になる。すなわち、上唇は背面貝輪用・腹面貝輪用のどちらの作業においてもほぼ廃材となったと考えられる。

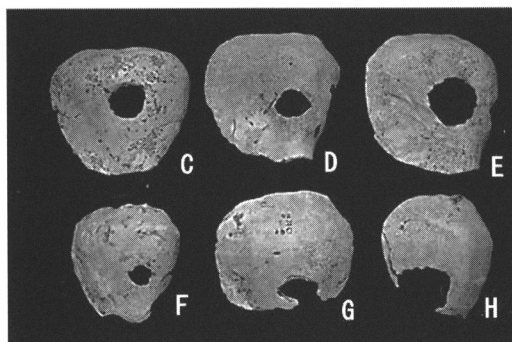
このほかの廃材である背面、突起、腹面、内唇、殻軸について見よう。図8のcに示す背面が除去されている場合、目指す腕輪は背面貝輪ではありえないので、これは腹面貝輪用の作業ということになる。<sup>(17)</sup> 反対に、腹面貝輪に属する部分である突起、腹面、内唇が廃材となる場合、これらを除



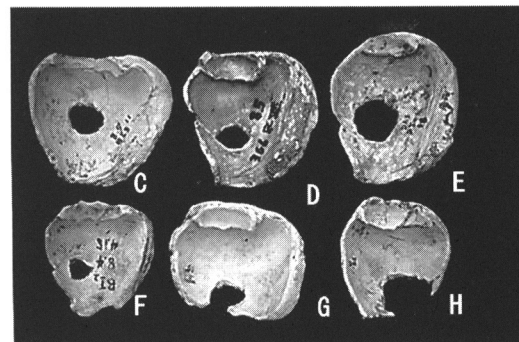
① (表面)



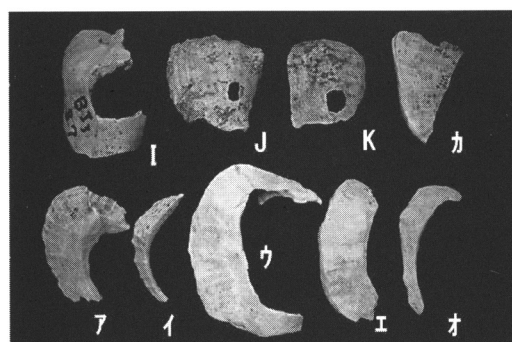
① (裏面)



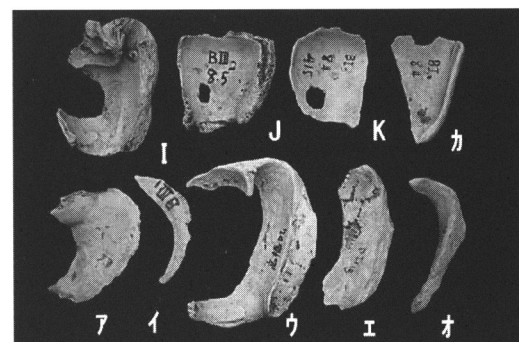
② (表面)



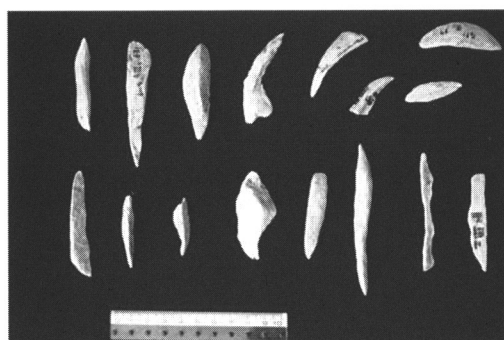
② (裏面)



③ (表面)



③ (裏面)



④

貝輪完成品(破損品): ① A, B

貝輪粗加工品(失敗品)

腹面貝輪用: ① 1~4

背面貝輪用: ②・③ C~K

貝輪廃材: ③ ア~カ, ④

図7 高橋貝塚出土ゴホウラ類貝輪完成品・粗加工品・廃材

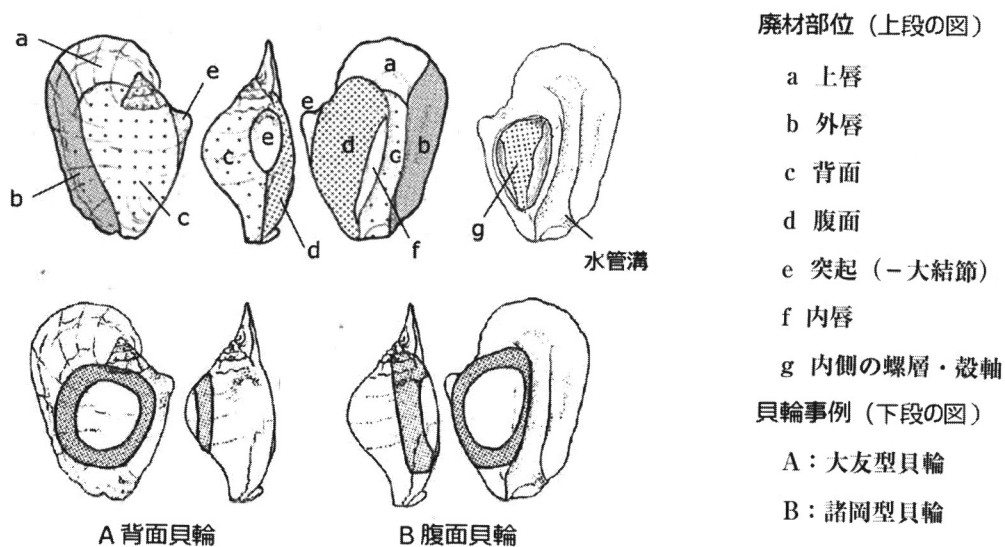


図8 ゴホウラ廃材の部位と背面貝輪・腹面貝輪

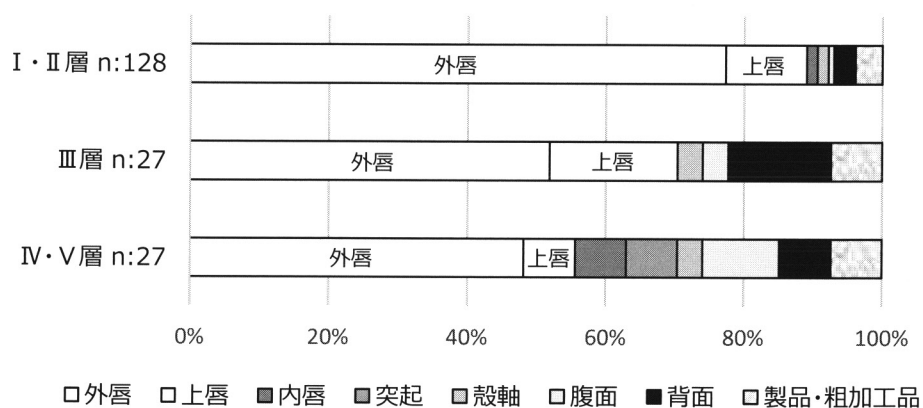


図9 高橋貝塚の層別ゴホウラ残存状況 (n:182 総数)

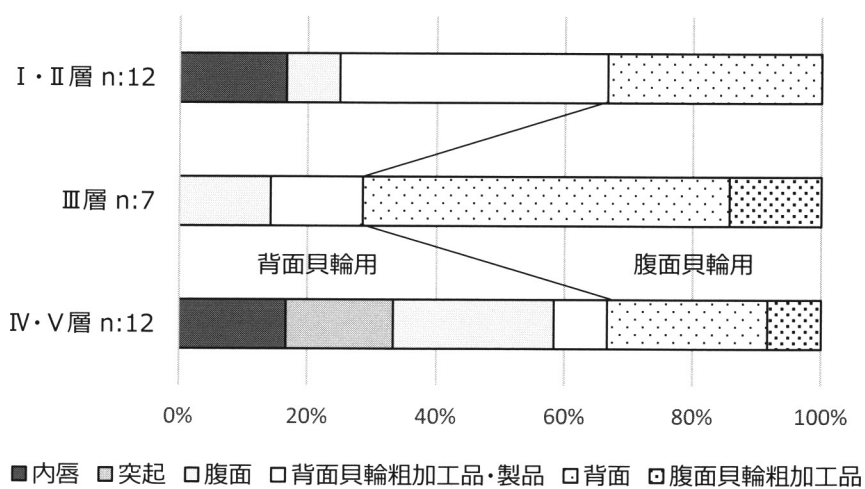


図10 高橋貝塚の層別ゴホウラ類残存状況2 (n:57 総数)



去すれば腹面貝輪は成立しえないので、これは背面貝輪のための行為といえる。殻軸を含む廃材については背面・腹面ともに除去すべき部分であるため、背面・腹面の別を決めがたい。

以上に基づいて、背面貝輪用と腹面貝輪用の作業で廃棄された貝殻を分け、それぞれの残存状況を追ってみよう。図10は廃材全体数から背・腹面の区別が難しい外唇、上唇と殻軸を除き、背面貝輪の完成品と腹面貝輪の粗加工品を加えたものを対象として、これらを背・腹面貝輪に分けて、層ごとの傾向をみたものである。このグラフが示すのは、生産現場に残る背面貝輪と腹面貝輪の廃材と失敗品、完成品の概要である。これらの多寡が生産状況を一定程度反映していることを前提とすれば、高橋貝塚の貝輪生産には次のような傾向が認められる。すなわち初めは背面貝輪の生産が腹面貝輪より多く、途中でこれが逆転し、その後背面貝輪が再び多くなる。

高橋貝塚では腹面貝輪の完成品が1点もない。注意すべきは腹面貝輪の粗加工品に、孔の周辺や打ち割った面に粗い研磨を加えるものがある点で、これが粗加工段階で完成する製品であること、すなわち輸出品であったことを示している。このような粗加工品がⅤ層、Ⅳ層、Ⅲ層で出土しているので、高橋貝塚人の腹面貝輪用の作業は、最初から粗加工品の製作を目指したもので、完成品を製作するものではなかったといえる。その粗加工品は腹面に丁寧に1孔をあけたもので、この作業で失敗することが多かったようだ。これに対して背面貝輪には完成品がある。これらは高橋貝塚人の自家用というより、この貝輪を好む西北九州沿岸部人に提供することが製作の主要な目的だったと考えられる。高橋貝塚人が腹面貝輪と背面貝輪の作業を明確に区別し、使い分けていたことは重要である。

ところで、図6のゴホウラ類出土数はⅤ層からⅠ層に向かって順調に増加している。これは背面貝輪の製品・粗加工品の傾向と整合的である(図11)。これに対し、腹面貝輪は複雑な動きをみせる。図10の腹面貝輪用の破片数は、Ⅴ・Ⅳ層からⅢ層で増加しているにもかかわらず、Ⅱ・Ⅰ層では減少し、粗加工品はみられなくなる。Ⅱ・Ⅰ層の時期、すなわち弥生前期後葉から中期前葉は、北部九州のゴホウラ腕輪の定形化が進み、続く大量消費にむけた動きが生まれる時期である。この時期における生産の減少は、腹面貝輪の流通に何らかの変化のあったことを窺わせる。これについては論の後半で再度取り上げることにする。

図12は出土したゴホウラ類を、貝殻の質によって分け、層ごとに

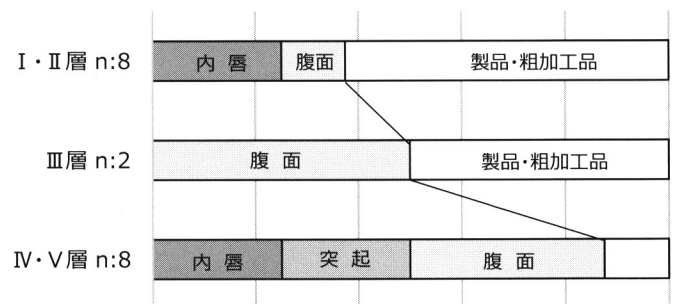


図11 背面貝輪関連破片の層別残存状況

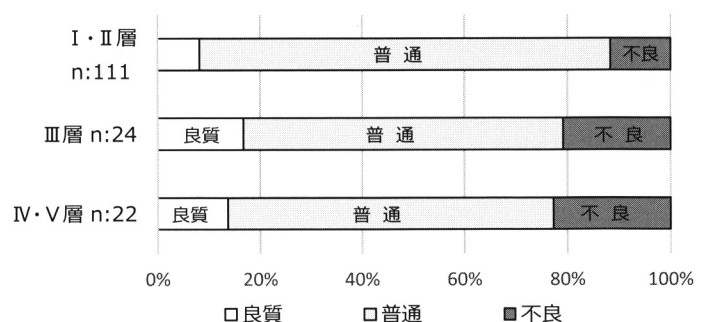


図12 高橋貝塚のゴホウラの質 (n:157)

比較したグラフである。調査時の観察から、貝殻の質を以下の三つに区分した。

良質：貝殻表面にキクスズメガイ等の生痕やウズマキゴカイやヘビガイ等の付着物のないもの

普通：貝殻表面に生痕や付着物はあるが、貝質は良好であるもの

不良：貝殻表面に生痕や付着物があり、カイメンによって貝質が劣化しているもの

どの層にも不良のものがあり、これらが交易されずに残されていることがわかる。出土数の多いⅡ・Ⅰ層では不良品の割合がやや減少するが、良質品の割合も減少している。

ゴホウラ類に少数含まれるアツソデガイは、北部九州の弥生社会で男児用の腕輪の素材として、成人男性用の素材であるゴホウラとともに消費された貝殻である。高橋貝塚での出土数はⅣ層の2点とⅢ層の2点、合計4点である。このうちⅣ層の1点が腹面貝輪粗加工品で、あとは背面貝輪の素材である。アツソデガイがⅣ層において早くも出土していることに注目しておきたい。

#### (4) 小結

貝殻の分析から見てきた高橋貝塚におけるゴホウラ類の消費状況は、以下のとおりである。

- ・高橋貝塚人は、ゴホウラ類の背面貝輪用と腹面貝輪用の二種類の加工を行っていた。彼等は背面貝輪用には製品と粗加工品を作り、腹面貝輪用には専ら粗加工品を製作した。
- ・背面貝輪用作業では、当初から製品を作り（Ⅴ・Ⅳ層）、途中で製品とともに粗加工品の生産を始め（Ⅲ層）、その後これを増産した（Ⅱ・Ⅰ層）。
- ・腹面貝輪用作業では、最初から粗加工品だけを作り、製品を作ることはなかった可能性が高い（Ⅴ・Ⅳ層）。粗加工品の生産は一旦増加し（Ⅲ層）、その後激減する（Ⅱ・Ⅰ層）。
- ・高橋貝塚に残る琉球列島産貝類の9割以上はゴホウラ類の貝殻である。小児用貝輪の材料であるアツソデガイは貝塚の初期（Ⅳ層）からみられる。
- ・ゴホウラ類の質はⅤ・Ⅳ層からⅡ・Ⅰ層まで大きな変化はなく、概ね良質である。

### ③……………高橋貝塚におけるオオツタノハ・イモガイ類の消費

#### (1) オオツタノハの加工

高橋貝塚のオオツタノハは、製品と中央に孔を穿った未成品に分けられる。未成品には穿孔しただけのものから研磨を加えたものまでがある。未成品の加工の程度が均一でないことからみると、これらが粗加工品として定形化していた可能性は低いだろう。オオツタノハの腕輪を好んだのは西北九州沿岸部の人々である。オオツタノハは腕輪への加工が比較的単純であることから、彼等が入手した貝殻は、穿孔されたもののほかに貝殻そのものも少なからず混在していたと考えられる。

#### (2) イモガイ類の加工

高橋貝塚で出土したイモガイ類2点のうち1点はⅡ層で出土したクロフモドキ加工品で、もう1点は採集品で、螺塔を使った円盤である（図13）。前者はクロフモドキの中でも大型貝（推定殻長

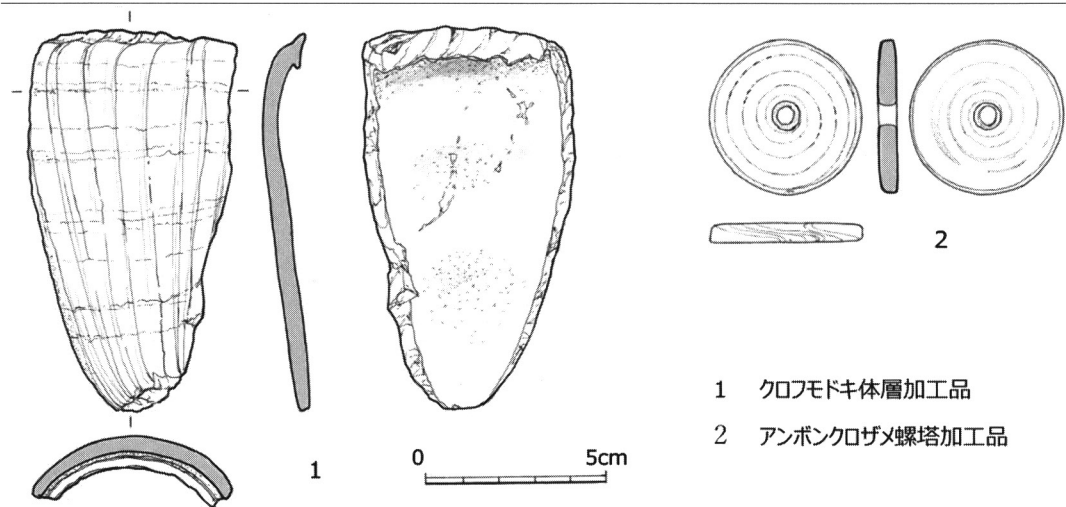


図 13 高橋貝塚出土イモガイ類製品

12～13cm) の体層を使った加工品である。これは、イモガイタテ型の初期の貝輪の素材であった可能性<sup>(20)</sup>がある。イモガイタテ型は、弥生前期から中期にかけて西北九州沿岸部から響灘沿岸の人々に好まれた貝輪型式である。Ⅱ層で出土したクロフモドキ破片は、この時期に貝輪素材が登場していたことを思わせるが、このほかにイモガイ貝殻の出土はない。イモガイ類は高橋貝塚を介した交易の主流になることはなかったようである。

#### ④……………貝輪からみた高橋貝塚登場の背景

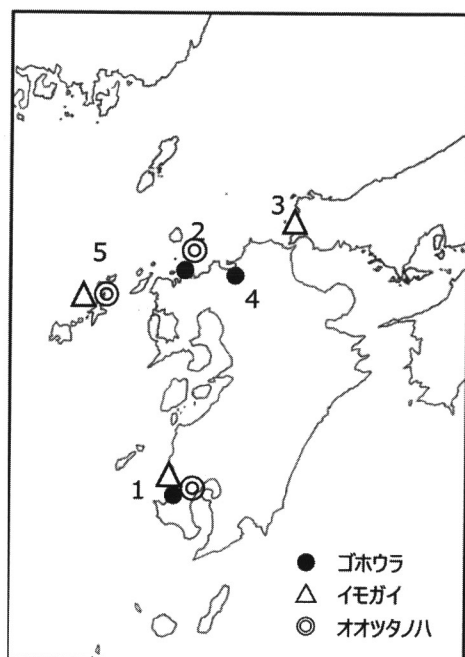
##### (1) 沿岸民の貝輪消費動向

高橋貝塚が稼働した弥生前期の前後、ゴホウラ類、オオツタノハ、イモガイ類の消費が以下の5遺跡で知られる(図14)。

- ・佐賀県大友遺跡 8 号支石墓 (弥生早-前期)<sup>(21)</sup>：オオツタノハ腕輪 [宮本編 2001]
- ・佐賀県大友遺跡 57 号支石墓 (板付 I 式併行期)：ゴホウラの背面貝輪 [東中川編 1981, 宮本編 2003]
- ・山口県中ノ浜遺跡 ST905 の覆石墓 (板付 II a 式)：イモガイタテ型貝輪 [乗安編 1985]
- ・長崎県松原遺跡 1 号支石墓<sup>(22)</sup> (弥生前期か)：オオツタノハ腕輪、イモガイ製品 [小田 1970]
- 第 1 号土坑墓 (弥生早期)：オオツタノハ腕輪 [川道編著 1997]
- ・福岡県金隈遺跡 103 号甕棺 (弥生前期後葉)：ゴホウラ腹面貝輪 [折尾ほか 1985]

以上のうち、弥生前期後葉の金隈遺跡を除くと、弥生前期中葉以前の貝輪の消費地は西北九州から響灘に至る沿岸部であったことがわかる。ゴホウラ腕輪については、最初に背面貝輪が登場し、その後腹面貝輪が作られた。

大友遺跡や松原遺跡の支石墓に近接する墓に副葬されている板付 I 式の小壺の存在、高橋貝塚の V 層でみられる西北九州型の甕の存在に注目すると、高橋貝塚が始まる直前の時期 (弥生早期から



1. 高橋貝塚
2. 大友遺跡（佐賀県）
3. 中ノ浜遺跡（山口県）
4. 金隈遺跡（福岡県）
5. 松原遺跡（長崎県）

図14  
弥生早期・前期の琉球列島産貝輪の使用地

前期前葉)には、すでに薩摩半島と西北九州沿岸部、福岡平野を結ぶ人とモノの往来が始まっていたことがわかる。この動きの中で高橋貝塚が薩摩半島に登場したと理解できる。

九州西海岸を南北に結ぶ動きは、北端の玄界灘を介してさらに東の響灘沿岸に通じていた。このことを示すのは中ノ浜遺跡のイモガイ腕輪の存在であるが、その貝輪が、高橋貝塚で1点のみ出土しているイモガイ類（クロフモドキ）の素材に対応する形であることは偶然ではないだろう。

このほか、松原遺跡1号支石墓に伴ったイモガイの螺塔による製品にも注意しておきたい。西北九州にわたったイモガイがタテ型貝輪の素材だけではなく貝殻そのものであった可能性を示しているからである。

## (2) 農耕民の貝輪動向

弥生時代前期後葉、福岡平野の農耕社会では、ゴホウラ腕輪をはめた死者が甕棺に葬られるようになる。金隈遺跡103号甕棺（伯玄式、K I b式）内で出土した貝輪はその最初の例で、この時期における唯一の着装例である。その形はゴホウラ腹面貝輪の最古型式の金隈型である。

腹面貝輪は背面貝輪に続いて九州に登場した貝輪であるが、両者は加工方法においてははっきり異なり、背面貝輪の延長上に腹面貝輪が登場するという継起的な関係にはない。さらに金隈型貝輪は、腕輪にとって機能上不要な上唇を残す特徴的な形をしている。農耕民は、ゴホウラの腕輪の製作方法でも形状でも、西北九州人たちの先例をほとんど継承していないのである。このことから、農耕民がきわめて自律的な考えのもとに、ゴホウラ類の貝殻を選択したことが窺える。特徴的な形状の金隈型が後続型式の腹面貝輪に変化して間もなく北部九州のゴホウラ消費は急増し、弥生中期を通して膨大な数の貝殻が琉球列島を北上することになる。

金隈型貝輪は、着装例以外では、山口県中ノ浜遺跡遺跡にこれに近い形状の破片が知られ〔木下

1989], 近年類似の貝輪が大友遺跡で出土している〔中村編 2007〕(図 16-14 参照)。大友例は上唇を残す形状やその他の形について金隈型貝輪によく対応する。<sup>(24)</sup>大友遺跡の金隈型貝輪は、墓ではなく墓地内の集石に伴って出土しているため時期は不明とされるが、大友遺跡には弥生前期末の甕棺墓も複数基あることから、本例も金隈 103 号甕棺に近い時期である可能性を考えてよいだろう。

ところで、ゴホウラ腕輪は貝殻の産地である沖縄諸島において、古くから作られていた。これらの多くは背面貝輪であったが、腹面貝輪も併存していたことが近年の調査で知られるようになっていく。縄文前期から後期の大堂原貝塚〔岸本ほか編著 2005〕、縄文後期の伊礼原 E 遺跡には明確なゴホウラ腹面貝輪が複数点出土している。ことに伊礼原 E 遺跡には金隈型貝輪から上唇を除去した形の貝輪があり注目される<sup>(25)</sup>〔松原・島袋編 2008: 第 56 図, 山野 2014:p.283〕。沖縄の人々の腹面貝輪には、ゴホウラの水管溝側(下側のやや尖った部分)の自然形状を残す特徴があり、金隈型貝輪の形状と共通する。このようにみると、金隈型貝輪の形状は、福岡平野の弥生人の腕輪イメージと<sup>(26)</sup>沖縄貝塚人の技術的伝統を基盤にして生まれたとみることも可能だろう。

### (3) 高橋貝塚の登場と腹面貝輪粗加工品の製作

高橋貝塚は、弥生前期中葉に、北部九州と共通する土器や石器を使う人々の半農半漁的な集落として薩摩半島に登場する。その最初の時期である V 層にゴホウラ腹面貝輪の粗加工品が存在することは重要で、この遺跡が最初から北部九州の貝輪消費に係わっていたことを端的に示している。

高橋貝塚のゴホウラ類腹面貝輪粗加工品はⅢ層までの各層に連続してみられ、合計 4 点ある。これらの粗加工品を、北部九州で弥生前期後葉に登場する金隈型貝輪に対応する粗加工品と見たいところであるが、決め手に欠ける。粗加工品 4 点が腹面の水管溝側が自然形状を保っている点は金隈型貝輪との共通点であるが(図 7-1~3, 図 16-13 参照)、粗加工品の上唇がすべて除去される、あるいは破損しているために、これらが金隈型を意識して作られたものかどうか判断できないからである。また粗加工品の厚さや水管溝側の造作は金隈型とやや距離がある。高橋貝塚 V 層とⅣ層の数値年代は弥生前期中葉に対応するので、甕棺型式による金隈型貝輪の弥生前期後葉より古く、両者間に時間差のあることも気になる。以上から高橋貝塚の粗加工品が金隈型成立前の何らかの形状の貝輪に対応している可能性も、一方では考えておきたい。<sup>(27)</sup>

高橋貝塚人が製作した腹面貝輪の完成形状については、未知の部分を残しているが、これら腹面貝輪が北部九州弥生人にむけたものであったことに変わりはない。以上から、福岡平野の農耕民は、ゴホウラ類の貝殻を入手するために、産地の沖縄諸島との間に位置する高橋貝塚の地を入手の中継地とし、高橋貝塚人はここで腹面貝輪の粗加工品を作ると同時に、西北九州人向けの背面貝輪や輪出用の貝輪素材を生産した、という説明が可能である。

### (4) 小結

高橋貝塚登場と稼働期の背景について、時期別にまとめる。

- ・高橋貝塚登場前(弥生時代早期から前期前葉)

西北九州沿岸部で、琉球列島産のゴホウラとオオツタノハによる腕輪の消費が始まる。腕輪の最初の消費者は支石墓の墓制をもち、西北九州沿岸部を基地に九州西海岸の海上移動をよ

くする人々であった。ゴホウラやオオツタノハは西北九州沿岸部の人々が南下して入手していた可能性がある。

・高橋貝塚成立期（弥生前期中葉）

高橋貝塚の地にゴホウラ類、オオツタノハが搬入され、一定程度加工されたものを含めて、西北九州沿岸民を介して、玄界灘沿岸、響灘沿岸の地域に届けられ、腕輪として消費されるようになる。高橋貝塚人は集落成立の最初から、西北九州人に向けてゴホウラ背面貝輪を作り、同時に福岡平野の農耕民のために腹面貝輪の粗加工品を製作し、北部九州でゴホウラ腹面貝輪が初めて作られる。この時期に、薩摩半島から西北九州、響灘沿岸を結ぶ人とモノの動きが顕在化する。

・高橋貝塚稼働期（弥生前期後葉）

金隈型貝輪が成立し、北部九州弥生人によるゴホウラ腕輪の消費が本格化する。高橋貝塚のゴホウラ背面貝輪の生産は増加するが、一方で腹面貝輪の生産は一旦増加した後、減少に転じる。

## ⑤……………生産地・中継地・消費地の対応

### （1）高橋貝塚の2時期と貝殻集積

以下では、貝殻消費地と生産地の関係を、高橋貝塚と、沖縄諸島の貝殻集積に残された貝殻の数値年代を介してみてゆく。貝殻集積とは、沖縄諸島の弥生時代併行期の遺跡に特徴的にのこされたゴホウラ類・イモガイ類の貝殻の集積をさし、その多くが一括性の高い遺構であることが炭素 14 年代測定でわかってきた〔木下 2021a, 2021b〕。集積には未加工の貝殻のほかに貝輪粗加工品、これを作るための素材が混在していることから、筆者はこれらを九州弥生人に向けた輸出用交易品及びこれに係わる素材等の保管施設と考えている〔木下 2017〕。

図 15 の左のグラフは、これまでに実施した沖縄諸島の貝殻集積の年代測定結果の一部である。グラフは貝殻集積内の個別の貝殻の年代を、同一集積ごとに年代の古い順に並べたもので、集積内の貝殻に新旧の年代差がある場合は、もっとも古い年代値の貝殻を基準に並べている。

第 1 章での検討結果に基づくと、高橋貝塚人は V 層の「700 cal BC 前後から 550 cal BC 前後」に貝交易に参入し、II 層の「500 cal BC 前後から 450 cal BC 前後」まで交易を継続している。この 2 時期を図 20 の確率密度分布図に二本の帯によって示した。説明の便宜のために、V 層の時間幅を「高橋 V 層ライン」、II 層の時間幅を「高橋 II 層ライン」と呼ぼう。確率密度分布のピークが高橋 V 層ラインに対応するのは大原貝塚 A 地点であり、嘉門貝塚 B と嘉門貝塚 A の一部がその前後に接している。高橋 II 層ラインに対応するのは、熱田第二貝塚、小堀原遺跡、伊礼原遺跡、阿波連浦貝塚 VI 層である。以下二つの時期に対応する遺跡のゴホウラ等を中心に、その前後のデータも含めて見てゆこう。

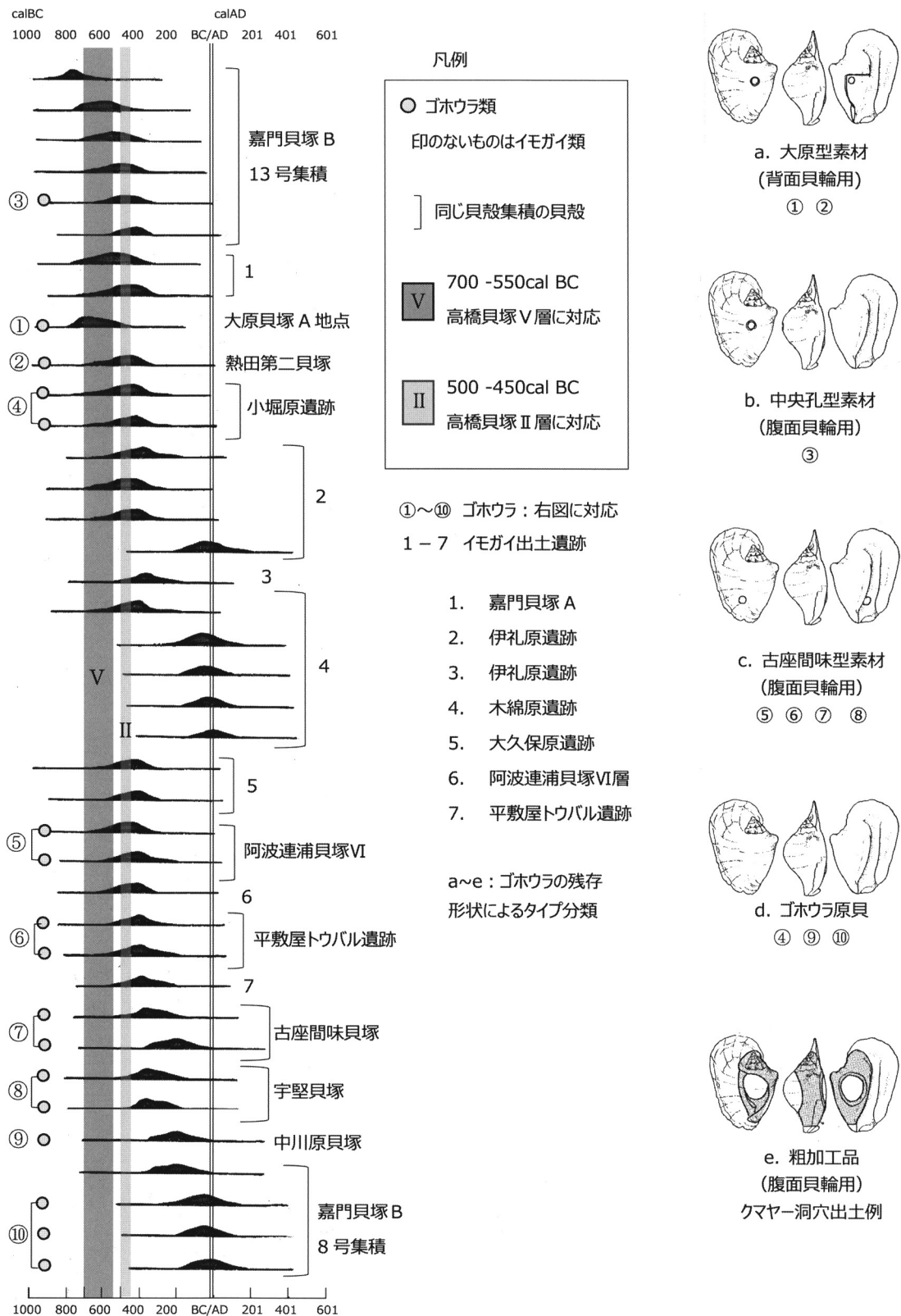


図 15 貝殻集積の較正年代の確率密度分布と対応するゴホウラ

## (2) 沖縄産の交易用ゴホウラ類

沖縄の貝殻集積に含まれるゴホウラ貝殻には、原貝・素材貝・粗加工品があり、粗加工品と素材にはそれぞれ特徴をもついくつかの型が認められる。本論にかかわる型式を表3に、対応する模式図を図15の右側に示した(図15のa～e)。

高橋Ⅴ層ラインに対応するのは大原貝塚A地点のゴホウラである(図15の左グラフの①、以下円囲み番号のみ表示)。遺跡では同じ形に加工された貝殻が7個まとまって出土し[眞編1980]、年代測定をしたものはその中の一つである[木下ほか2021]。ゴホウラは良質の貝殻で、背面の一部と打ち割って整えられた面には粗い研磨が加えられており、これが交易用の貝殻であることを示している。腹面を大きく除去していることから、これが背面貝輪用であることは明かで、さらに加工すると高橋貝塚の背面貝輪粗加工品(図7の写真②)になる。定形化している点を重視して大原型素材とよんでおきたい。同じ型は熱田第二貝塚(②)のゴホウラでも出土しており、ここでは打ち割った面の研磨がより丁寧になっている。本例の年代は高橋Ⅱ層ラインに対応しているので、大原型の製作はこの時期まで継続したといえる。

高橋Ⅱ層ラインについてみよう。嘉門貝塚B(③)のピークがよく対応している。③は背面中央に1孔を穿っただけの中央孔型素材である。中央孔型素材からは背面貝輪も腹面貝輪も作ることができるが、同じ時期に背面貝輪専用の大原型が存在するので、これは腹面貝輪用であろう。中央孔型が大原型の腹面加工を省略した形であることや、大原型に遅れて登場することは、背面貝輪用から腹面貝輪用の素材が生まれたことを示唆する。高橋Ⅱ層ラインに近い小堀原(④)は原貝である。高橋Ⅱ層ラインからピークのやや下る阿波連浦Ⅵ層(⑤)、平敷屋トウバル(⑥)、古座間味貝塚(⑦)、宇堅貝塚(⑧)、中川原貝塚(⑨)はすべて古座間味型である。古座間味型は背面の外唇近くの水溝溝寄りの位置に1孔を穿つ特徴がある。ここに穿孔されると背面貝輪は作れないので、これは明らかに腹面貝輪用の素材といえることができる。

以上から、沖縄での交易用ゴホウラが、大原型素材(背面貝輪用)⇒原貝・中央孔型素材(腹面貝輪用)⇒古座間味型素材(腹面貝輪用)と変化していること、すなわち背面貝輪用から腹面貝輪用に交易品の主流が変わっていることが窺える。

表4は、貝殻集積と高橋貝塚の関係を、数値年代を介して整理したものである。高橋Ⅴ層の時期

表3 沖縄の貝殻集積内のゴホウラ分類

分類	型式	対応する貝輪	形状の特徴	図20右図	備考
原貝		背面貝輪 腹面貝輪	未加工	d	土井ヶ浜型貝輪にも対応
素材	大原型	背面貝輪	背面に1孔。腹面半分と殻軸を除去。割れ口を粗く研磨	a	旧熱田型 <sup>(28)</sup>
	中央孔型	腹面貝輪	背面の中央に穿孔	b	嘉門貝塚Bでは中央孔型・古座間味型・粗加工品が共伴
	古座間味型		背面の水溝溝側に穿孔	c	
粗加工品	嘉門Ⅰ型	腹面貝輪	孔周辺がしばしば研磨される	e	九州の厚手型貝輪に対応



に対応するゴホウラ原貝の年代は得られていないが、原貝は貝交易の期間を通して運ばれていると考えられるので、存在を推定して括弧つきで示した<sup>(29)</sup>。高橋Ⅱ層後の時期については、古座間味型の年代の確率密度分布のピークがすべて高橋Ⅱ層ラインより新しいところにあるので、これに対応させた。これについて注目

したいのは、嘉門貝塚Bの二つの事例である[下地・松川編1991]。この遺跡の7号集積では古座間味型が諸岡型貝輪の貝輪粗加工品と共伴し、後者が前者をもとに作られたことを示唆する。32号集積では厚手型貝輪の粗加工品が単独で出土している。厚手型は弥生中期前葉に諸岡型に先行して登場する貝輪型式なので、これも古座間味型素材から作られたとみてよいだろう。古座間味型素材の時期に、沖縄で腹面貝輪粗加工品の生産が始まっていたことがわかる。

### (3) 高橋貝塚の変化

第2章(3)で指摘した「腹面貝輪用の作業がⅤ・Ⅳ層からⅢ層で増加しているにもかかわらず、Ⅱ・Ⅰ層で激減している変化」(図10)について検討したい。

表4で示した沖縄の貝殻集積に残るゴホウラの状態をふまえると、高橋貝塚Ⅴ層の時期、沖縄から高橋貝塚に届いていたのは背面貝輪素材(大原型)とゴホウラ原貝であろう。高橋貝塚人はおそらく大原型素材から背面貝輪を、原貝から腹面貝輪の粗加工品を作っていた。Ⅱ層の時期になると、腹面貝輪用の中央孔型素材が届くようになる。中央孔型は大原型から漸移的に変化・分岐した素材なので、一つ前のⅢ層に中央孔型素材が届き始めていた可能性がある。背面の中央孔は、背面を除去して腹面貝輪粗加工品を作る作業の効率を上げたことであろう。上記の推察通りⅢ層の時期に中央孔型素材が高橋貝塚に届いていたとすれば、これによって粗加工品の生産数が増加したことは想像に難くない。Ⅲ層には奄美地域に特有の丸底土器(図4の14)も伴っており、南との往來の活発化が窺える。図10で腹面貝輪用の加工廃材の割合がⅢ層で増加しているのは、こうした動向を反映しているのではないだろうか。

しかしその後Ⅰ・Ⅱ層において粗加工品の生産割合は低下する。表5は高橋貝塚の粗加工品と製品について、層ごとの出土状況を示したものである。背面貝輪の製作が終始一貫しているのに対し、腹面貝輪の粗加工品はその前半の時

表4 沖縄諸島の貝殻集積にのこされた交易用ゴホウラと所属時期

時 期 ゴホウラ	高橋Ⅴ層の時期 (弥生前期中葉)	高橋Ⅱ層の時期 (弥生前期後葉)	高橋Ⅱ層後の時期 (弥生中期前葉)
背面貝輪 用 貝 殻	大原型素材		—
腹面貝輪 用 貝 殻	—	中央孔型素材	古座間味型素材 粗加工品
背面・腹面 兼 用 貝 殻	(原貝)	原貝	

表5 高橋貝塚の背面貝輪と腹面貝輪

層位	背面貝輪		腹面貝輪
	粗加工品	製品	粗加工品
Ⅰ層	2		
Ⅱ層	1	5	
Ⅲ層	3	1	1
Ⅳ層	3	1	2
Ⅴ層		1	1

(数字は出土点数)

期にみられるに過ぎない。生産現場に失敗品が残っていないのは、加工技術の上達による失敗品の減少や、すべての粗加工品が搬出されたという可能性もあるが、高橋貝塚Ⅱ層以後に沖縄で粗加工品生産が始まっていることを勘案すれば、Ⅱ層の時期にその兆候が現れているとみてもよいだろう。高橋貝塚での腹面貝輪の減産は、それまで高橋貝塚が担っていた北部九州向けの粗加工品生産が、原産地に移り始めるという動きを反映している可能性がある。高橋貝塚が間もなく終焉を迎えるのは、この変化一貫交易上の中継地としての役割の低下と関連しているのではないだろうか。このように考えると、高橋貝塚を、北部九州側のゴホウラ需要を背景に登場し、その需要が低下するとともに衰退した集落という視点で捉えることが可能である。

#### (4) 高橋貝塚以前一貫交易開始前夜

北部九州のゴホウラ消費の始まりは、西北九州の支石墓人による弥生前期前葉のゴホウラ腕輪の使用である。現在知られる事例は、海岸砂丘上につくられた墓地である大友遺跡57号支石墓1例にすぎないが、この時期の沖縄ではこれに対応する形の素材がすでに定形化しているので(大原型)、西北九州ではすでに一定量のゴホウラ腕輪の消費があったと推測される。この時期の西北九州人と沖縄の貝塚人の最初の接触を示すのが、沖縄本島の木綿原遺跡の埋葬遺構(1号石棺)(弥生前期前葉併行期)で、この接触によってゴホウラが腕輪素材として西北九州の弥生人に認識されたと考えられる[木下2021b]。平野部の弥生人も、その後おそらく西北九州人とともに沖縄に至り、豊富な大型巻貝の存在や貝塚人たちの貝殻加工技術の知見を得て、みずからゴホウラの腹面貝輪をデザインし、独自の貝輪である金隈型貝輪を創作するに至ったのであろう。

高橋貝塚に残されている貝殻の9割以上がゴホウラ類であることは、北部九州の弥生前期の消費傾向によく対応している。高橋貝塚出土の粗加工品をみる限り、金隈型貝輪およびそれ以前の貝輪を含めて、それらの粗加工品は北部九州に相応の数が運ばれたと推測されるが、消費地での出土例は限られており、この点において出現の経緯にはなお詰められるべき部分がある。

## ⑥……………結語

貝交易の中継地としての高橋貝塚について、述べてきたことを図16に模式化し、以下をまとめる。

高橋貝塚は弥生前期中葉(紀元前7世紀中葉を前後する時期)に始まり、同前期後葉(紀元前5世紀前半ころ)を中心に、弥生中期前葉まで継続的に存在した集落遺跡である。

高橋貝塚には琉球列島産の大型巻貝を用いた腕輪製作の各段階の工程を示す貝殻177点が残されている。これらの9割以上はゴホウラ類(ゴホウラ・アツソデガイ)で、イモガイ類(アンボンクロザメ・クロフモドキ)とオオツタノハがわずかに混在する。高橋貝塚のゴホウラ類は、同時期の沖縄諸島の貝殻集積との対応関係からほぼ沖縄産とみられる。

高橋貝塚人は当初から、沖縄貝塚人が作ったゴホウラの背面貝輪用の素材(大原型)をもとに西北九州人のために背面貝輪を作り、ゴホウラ原貝から北部九州人のために腹面貝輪粗加工品を作り、これらを輸出していた。腹面貝輪ではその後沖縄から粗加工品用の貝輪素材(中央孔型)が届くようになって粗加工品生産の効率が上がるが、間もなく腹面貝輪粗加工品の生産拠点が高橋貝塚から

沖縄に移り、腹面貝輪粗加工品が中継地を介さずに消費地に届くようになると貝交易における高橋貝塚の存在価値は低下し、間もなく遺跡は衰退する。

高橋貝塚は、北部九州人が貝交易参入を契機に、長距離の海上交易路上に設置した貝殻流通上の中継地であった。沖縄から薩摩半島に届いた貝殻や貝輪素材を製品化し、あるいは消費者の要求に合わせた未成品に仕上げて消費地に届けるという、貝交易初期の中継地としての役割を果たしたことが、高橋貝塚の最大の特徴といえる。

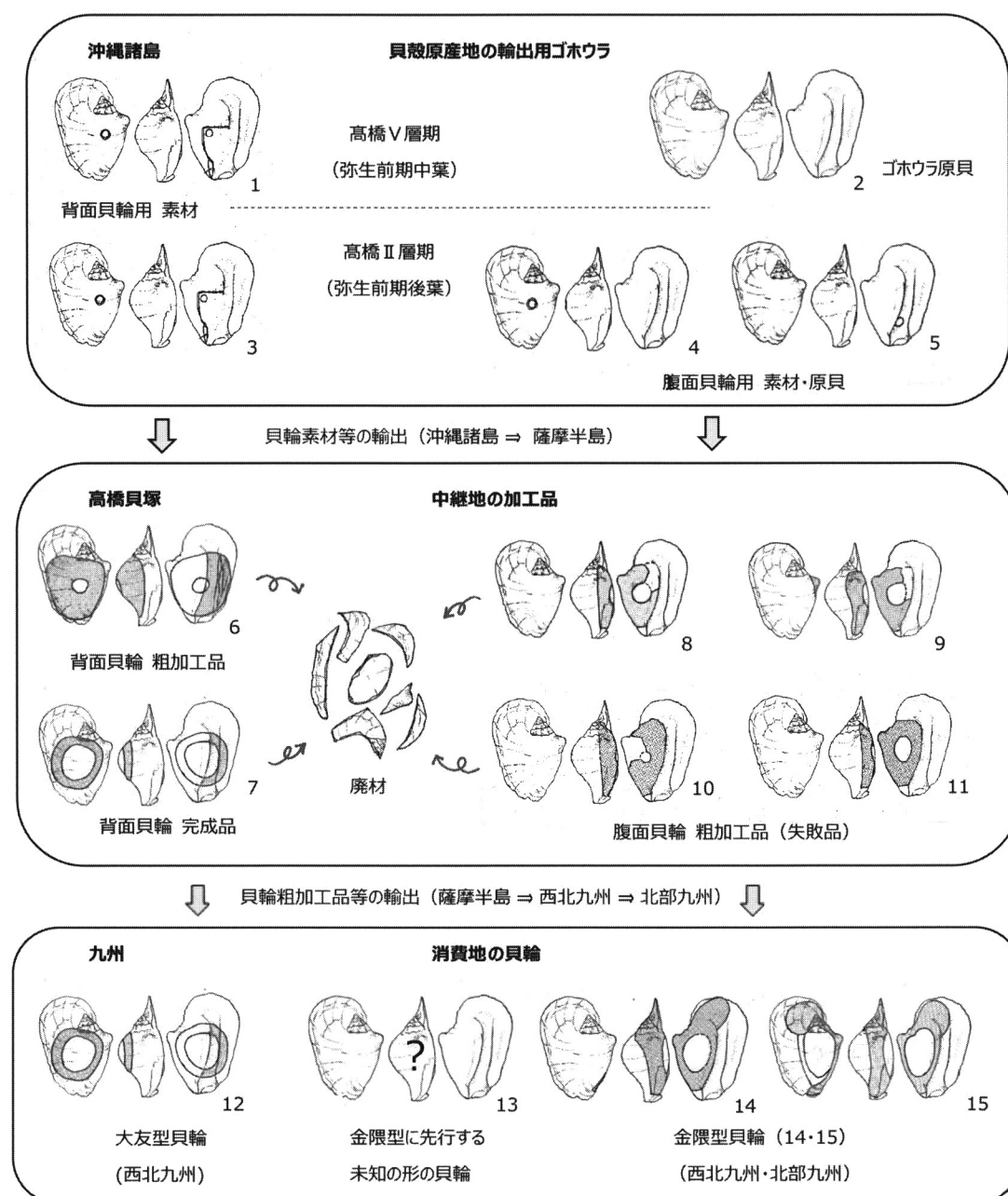


図 16 弥生時代前期中葉～後葉の貝交易模式図

1・3:大原型素材 4:中央孔型素材 5:古座間味型素材 13:大友遺跡出土 14:金隈遺跡出土

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、高橋貝塚出土ゴホウラの調査では鹿児島県立埋蔵文化財センターの中原一成センター長、前迫亮一前センター長、資料担当の東和幸氏にご尽力いただき、鹿児島市ふるさと考古歴史館の中村友昭氏にはゴホウラ類悉皆調査ならびに本論にかかわる議論に参加していただき、熊本大学埋蔵文化財センターの山野ケン陽次郎氏には全文を点検していただいた。出土土器について国立歴史民俗博物館の藤尾慎一郎氏に情報・資料を提供いただき、編年について教示を賜った。年代測定ならびにその解釈においては同館坂本稔氏、瀧上舞氏に教示を賜った。あわせて厚く感謝申し上げる。

## 註

(1)——学名は貝類学者の黒住耐二氏の教示による。イモガイ類については奥谷2017に拠った。

(2)——文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤボネシア人の起源と成立の解明」(2018～2022年 領域代表齋藤成也)のB01班(代表：藤尾慎一郎)による共同研究。

(3)——「すべての遺物について再検討し、以前に触れなかった面にも、残すところなく検討を加え、型式論的な考察を一擲して、最も重要な層序を正確に表現することに努めた」[河口2000：p.48]として、層位に準じた作業結果を提示している。

(4)——「貝層の部分は層位が明確」[河口2000：p.49]、「BトレンチⅠ区6層(V層該当)」[同p.53]、その他河口2000文献第6図の土器の層位メモとの照合による。

(5)——「BⅠ6」については、河口氏により「V層該当」であるとの指摘がある。「CⅣ6」については、Cトレンチの層位図がなく、Ⅰ～V層との対応が不明である。ただ、CトレンチⅣ区はAトレンチⅣ区に隣接しているのでAトレンチⅣ区を介して対応関係を間接的に把握できる。Cトレンチの6層を上から6番目の層とすれば、AトレンチⅣ区では4層に対応し、すなわちV層に対応すると理解できる。

(6)——「貝層より出土する土器は前期に属し、これを一形式(ママ：筆者)とみることもできるが、多少層位による変化もみられるので、分割は少々困難な点もあるが、形式に分けて高橋Ⅰ式、高橋Ⅱ式とする。」「[河口1965：p.91]

(7)——河口1965文献では「高橋Ⅰ式」と表記されたが(アラビア数字)、その後土器を再検討した河口2000文献では「高橋Ⅰ式」(ローマ数字)と表記されたので、後者に準じる。高橋Ⅱ式も同様。

(8)——高橋貝塚出土の土器については、高橋貝塚のあ

る田布施平野の土器を詳細に検討した川口雅之氏の編年案がもっとも新しく、高橋Ⅰ式と高橋Ⅱ式は新たに「田布施Ⅲ式」として捉えられている。ここでは高橋貝塚の層位ごとの検討をするために、従来の高橋Ⅰ式と高橋Ⅱ式を使うことにする。

(9)——図4内の土器は[藤尾1993]の図1、[河口2000]の第4図、[藤尾2014]の図16～図20に因った。藤尾氏による図面では、同氏より出土グリッドと層位情報の提供をうけた。

(10)——西北九州型の甕は以下の特徴をもつ[藤尾1991：pp.240-241、藤尾2001：p.9]

- ・ 屈曲二条甕である
- ・ 口縁部の突帯が、口縁上端から突帯幅一つ分以上さがった位置にある
- ・ 弥生前期の九州西北部、五島列島の外海に面した広域に分布する

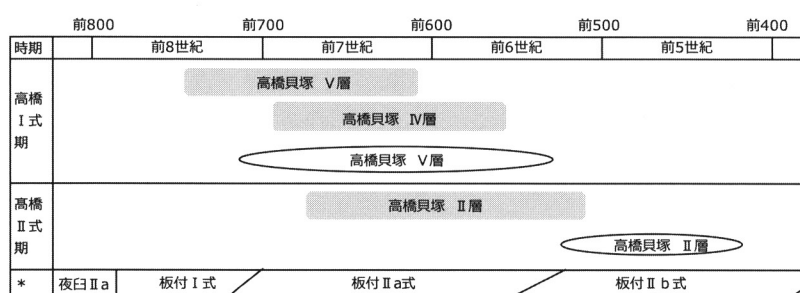
(11)——Ⅲ層については、年代測定用の適切な資料を選ぶことができなかった。なお、図5は[木下ほか2022]の確率密度分布グラフと同じ内容である。表現が異なるのは、木下ほか2022では試料の前後関係を考慮したモデルに拠り、図5は前後関係を考慮しないモデルに拠るためである。後者の方が、確率密度分布グラフでは層ごとの特徴がより明確に示されているため、本論ではこちらを使用する。

(12)——炭素14年代については、本誌掲載の「鹿児島県南さつま市高橋貝塚の年代学的調査」において坂本・瀧上氏による解析モデルが示され、筆者を含めた共同研究ではこれに基づいた結論を示した。本論では貝殻と獣骨の較正年代の差に鑑み、両者の重なり部分の明らかな部分に注目して重複する期間を抽出した。以下それぞれをモデル年代・重複年代と呼ぶ。付図1は両者を比較したものである。これによると高橋Ⅰ式に対応するⅣ層とⅤ層

はモデル年代・重複年代ともに大きな違いはみられないが、高橋Ⅱ式についてはやや差がある。一方、高橋貝塚のⅤ層とⅣ層、Ⅱ層の土器については、以下を指摘できる。

Ⅳ・Ⅴ層：板付Ⅱa式を主体とし、板付Ⅰ式新もみられる。

Ⅱ層：板付Ⅱb式を主体とし、板付Ⅱa式もみられる。ここでは、モデル年代・重複年代と層ごとの出土土器の型式を踏まえて、以下のように理解しておきたい。高橋Ⅰ式は主として板付Ⅱa式に対応し、高橋Ⅱ式は主として板付Ⅱb式に対応する。



付図1 高橋貝塚の年代

■ モデル年代  
○ 動物と貝殻の較正年代の重なり期間による年代  
\* 北部九州の型式（国立歴史民俗博物館2014と藤尾慎一郎氏の教示による）

(13)——ここで「ゴホウラ類」、「イモガイ類」としたのは、これらが弥生人が恣意的に選んだもので、貝類学の分類概念（ソデボラ科やイモガイ科）に必ずしも対応しないことによる。

(14)——出土したゴホウラ類には、同一個体に属するものが存在すると予想されるが、割れ口の風化や小片の多さを鑑みるとその検証はかなり困難と判断され、また本作業の目的に鑑みて接合関係の検討は行なっていない。ここでは出土した貝殻破片は大小を問わず1点としている。

(15)——廃材の外唇部について、河口氏はその「断面三角形で先端がとがり刃をつけたもの」であることから「貝製品利器」としている。その可能性がないとはいえないが、ここでは残存する他の部位と合わせて廃材としての意味を重視したい〔河口1965：p.105〕。

(16)——これらが金隈型貝輪をめざしていたとすればその失敗品となるが、もとより上唇を残さない、金隈型成立前の別形状の貝輪をめざして作られたものであった可能性もある。この点は北部九州における新資料を待ちたい。

(17)——「背面」に分類された廃材は、すべて長径7cm以上のものであり、背面貝輪粗加工品作成時に生じると予想される小破片を含むものではない。こうした小片は

調査時に回収されていない可能性がある。

(18)——弥生前期に北部九州と沖縄間を結んで貝殻を運搬したのは、西北九州沿岸部の人々であったと考えられる〔木下1989〕。高橋貝塚に西北九州に特有の甕形土器があることから、彼等が高橋貝塚を訪れ、貝輪を直接入手していた可能性は高い。

(19)——貝製腕輪の表記を、以下のようにする。貝類名称を伴う場合は意味の重複を避けて「腕輪」とし、伴わない場合は「貝輪」とする。例：ゴホウラ腕輪、イモガイ腕輪、腹面貝輪、背面貝輪。

(20)——弥生前期のイモガイタテ型貝輪は、楕円形の扁平な形状をなす。

(21)——8号支石墓の人骨の最新の較正年代、800-520 cal BC (2σ) に基づくと、紀元前7世紀前半前後とみられる〔瀧上ほか2021〕。

(22)——松原遺跡1号支石墓は明治5年に発見さ

れたもので、詳細は不明であるが、近接する墓で板付Ⅰ式の小壺が出土しており、1号支石墓も弥生前期の墓である可能性が高い。人骨はオオツタノハ腕輪2個以上とイモガイの螺塔を用いた製品を伴っていたとされる。イモガイ製品の写真が報告されているが、形状の詳細がつかめず腕輪であるかどうか判断できない〔小田1970〕。

(23)——背面貝輪と腹面貝輪は作成の発想が異なっている。背面貝輪はゴホウラの背面に穿孔することで得られるが、腹面貝輪は背面から腹面にかけて孔を貫通させる必要がある、そのために内部の螺層と殻軸を除去しなければならない。ゴホウラでは螺層も殻軸も部厚いので、腕輪として残すべき部分を破損させずに加工するにはかなりの技術が必要だったはずである。

(24)——発掘調査の報告では、ゴホウラ腕輪は規則性のない集石内で出土したとされる。この一帯が墓地であることや、5m北で人骨が検出されていることを勘案すると、本来墓に伴っていた貝輪が原位置を離れて発見された可能性がある。未製品と報告されるが、貝輪を実見する限り、表面の剥離が進んだ完成品とみてよいのではないかと思う。

(25)——伊礼原E遺跡のⅤ層（縄文後期）ではゴホウラ諸岡型貝輪の粗加工品と見まがうような腹面貝輪未成品が複数出土しており、同様の製品がⅣ層（縄文晩期～

グスク時代)にも継続している[山城・島袋編2010]。伊礼原E遺跡では腹面貝輪製作の伝統が縄文後期以降継続していたとみられる。金隈型貝輪に類似する貝輪は採集品なので、縄文後期の可能性もある。

(26)——筆者は福岡平野の弥生人が琉球列島産の腕輪に求めた象徴的イメージを、同時期の韓半島の青銅器に多くみられる渦紋であろうとみている。弥生人が貝輪の造形に要求したのはその螺構造を腕輪に取り入れることであったと考えている[木下1988]。

(27)——金隈型貝輪は福岡平野に成立した成人用大型甕棺の最初の型式の甕棺内で発見された。これ以前の成人墓は木棺墓であり、砂丘地以外の地では棺内の人骨はほとんど残存していない。木棺墓に葬られていた人物がゴホウラ腕輪を伴っていたとしても、これが残る可能性は

人骨同様に極めて低い。弥生前期中葉の木棺墓にゴホウラ腕輪が伴っていたとすれば、それは初現期の金隈型か、それに先行する形の貝輪であろう。

(28)——筆者は先行論文においてこのタイプを熱田型の粗加工品としたが、大原型素材に訂正・変更する。粗加工品から素材への訂正は、本稿において粗加工品の一段階前の加工品を素材と呼ぶことに統一したことによる。熱田型から大原型への変更は、このたびの年代測定によって熱田第二貝塚の粗加工品より大原貝塚の粗加工品の方がより古いことが明らかになったことによる。[木下2017]。

(29)——原貝は素材や粗加工品のための材料であるとともに、響灘沿岸で需要が継続したゴホウラ土井ヶ浜型貝輪に対応する交易品でもあった。

## 参考文献

- 奥谷喬司編著 2017:『日本近海産貝類図鑑』【第二版】  
小田富士雄 1970:「五島列島の弥生文化—総説篇—」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2二号, 長崎大学医学部解剖学第二教室, 九州考古学研究—弥生時代篇— pp.529-588  
折尾学・永井昌文・永田諠一著 1985:『史跡金隈遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集, 福岡市教育委員会  
河口貞徳 1965:「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻第2号, pp.73-109, 東京考古学会  
河口貞徳 2000:「縄文から弥生への軟着陸の高橋貝塚」『鹿児島考古』第34号, pp.43-59, 鹿児島県考古学会  
河口貞徳 2005:「高橋貝塚」『先史・古代の鹿児島 遺跡解説 資料編』, pp.223-227, 鹿児島県教育委員会  
川口雅之 2019:「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早期前期土器の編年」『鹿児島考古』第49号, pp.95-108, 鹿児島県考古学会  
川道寛編著 1997:『宇久松原』宇久町調査報告書第4集, 宇久町教育委員会  
岸本利枝・真栄田義人・宮里牧・新城司・岸本卓己・比嘉久編著 2005:『大堂原貝塚』名護市文化財調査報告書第17集, 名護市教育委員会  
木下尚子 1988:「南海産貝輪はじまりへの予察」『日本民族・文化の生成』, 六興出版, pp.519-546  
木下尚子 1989:「南海産貝輪交易考」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集刊行会編 pp.203-250, 文献出版  
木下尚子 1999:「鹿児島県の古代貝文化」『鹿児島考古』第33号, 鹿児島県考古学会, pp.15-42  
木下尚子 2017:「貝輪粗加工品の流通—弥生人貝交易再論—」『南島考古』第36号, 沖縄考古学会, pp.143-160  
木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2019:「沖縄県浦添市所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集, pp.333-338  
木下尚子 2021a:「貝殻集積からみた先史時代の貝交易—2018年の炭素14年代測定結果をもとに—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, pp.213-246  
木下尚子 2021b:「貝殻集積からみた先史時代の貝交易(2)—2019年の炭素14年代測定結果をもとに—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集, pp.13-42  
木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2020:「沖縄県北谷町所在遺跡出土貝塚後期の貝殻集積の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集, pp.313-320  
木下尚子・坂本稔・瀧上舞 2022:「鹿児島県南さつま市高橋貝塚の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第237集, pp.151-162  
国立歴史民俗博物館 2014:『弥生ってなに?!』企画展示図録  
瀧上舞・坂本稔・藤尾慎一郎 2021:「佐賀県唐津市大友遺跡第5・6次調査出土弥生人骨の補正年代について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, pp.375-384

- 當眞嗣一編 1980：『大原一久米島大原貝塚群発掘調査報告一』沖縄県文化財調査報告書第32，沖縄県教育委員会
- 中村章郎編 2007：『呼子町内遺跡発掘調査報告書』唐津市文化財調査報告書第140集，唐津市教育委員会
- 乗安和二三編 1985：『中ノ浜遺跡 第9調査発掘調査概報』豊浦町教育委員会
- 東和幸 2011：「九州南部地域」『講座日本の考古学3 弥生時代（上）』，pp.146-164，青木書店
- 東中川忠美編 1981：『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集，呼子町郷土研究会
- 藤尾慎一郎 1990：「西部日本の刻目突帯土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集，pp.1-67
- 藤尾慎一郎 1991：「水稻農耕と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』，pp.187-270，横山浩一先生退官記念事業会
- 藤尾慎一郎 1993：「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号，pp.22-38，鹿児島県考古学会
- 藤尾慎一郎 2001：『弥生文化成立期の西日本・韓国の土器』，平成12年度文部科学省科学研究費「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究（研究代表者 春成秀爾）」，考古学資料集19
- 藤尾慎一郎 2014：「西日本の弥生時代稲作開始年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集，pp.113-143
- 藤尾慎一郎 2014b：『弥生ってなに？！』国立歴史民俗博物館企画展図録
- 下地安広・松川章編 1991：『嘉門貝塚B』，浦添市文化財調査報告書第21集，浦添市教育委員会
- 松原哲志・島袋春美編 2008：『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化調査報告書第27集，北谷町教育委員会
- 宮本一夫編 2001：『佐賀県大友遺跡一弥生墓地の発掘調査』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究（研究代表者 春成秀爾），考古学資料集16
- 宮本一夫編 2003：『佐賀県大友遺跡Ⅱ一弥生墓地の発掘調査一』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究（研究代表者 春成秀爾），考古学資料集30
- 山崎純男 1980：「弥生文化成立期における土器の編年的研究一板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合一」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』，pp.117-192，鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 山崎純男 1986：「貝のきた道」『図説発掘が語る日本史』第6巻，pp.127-137，新人物往来社
- 山城安生・島袋春美編 2010：『伊礼原E遺跡』（第二分冊），北谷町文化調査報告書第31集，北谷町教育委員会
- 山城安生・島袋春美編 2012：『小堀原遺跡一桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成17～20年度）』北谷町文化財調査報告書第34集，北谷町教育委員会
- 山野ケン陽次郎 2014：「先史琉球列島における貝製品の変化と画期」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集，pp.277-291，六一書房

（熊本大学名誉教授）

（2021年11月26日受付，2022年3月15日審査終了）



## **The Takahashi Shell Mound in Kagoshima Pref. : A Relay Point in Neolithic Shell Trade Based on the Analysis of Strombus Shell Waste Fragments Excavated from the Site**

KINOSHITA Naoko

The Takahashi shell mound is located in southern Kyūshū. It was a relay point for shell trade between the Okinawa Islands and northern Kyūshū during the Yayoi period. This paper attempts to describe the actual situation of the relay through the analysis of the traded shells left in the site as outlined below.

- The Takahashi shell mound is a settlement site that started in the middle of the early Yayoi period and continued to the latter part of the same period. The cultural layers from layer I to layer V are deposited almost horizontally, and 187 shell fragments in total have been excavated. They reveal all stages in the production process for bracelets from large conches from the Ryūkyū Islands. More than 90% of these are *Strombus*.

- The people living at Takahashi shell mound made two types of shell bracelets during the layer V period and exported them to different areas. One is a finished product of shell bracelets using the back of *Strombus*. This was made from roughly processed products that arrived from Okinawa and was exported to northwestern Kyūshū. The other was a roughly processed product using the abdomen of *Strombus*, which was exported to northern Kyūshū.

- During the period of layer IV, people began to produce roughly processed items from the back of shells for bracelets by themselves and exported these to northwestern Kyūshū.

- During the period of layer I and II, roughly processed products from the abdomen of *Strombus* began to decrease at the Takahashi shell mound site, on the other hand, an increase of the same style of roughly processed products in sites of the Okinawa Islands can be observed parallel in time. Both phenomena indicate that the production base had moved from the Takahashi shell mound to Okinawa.

- Roughly processed products of the abdominal shell bracelets began to reach the consumption in northern Kyūshū directly, without passing the Takahashi shell mound any more, such that the importance of the site as a relay point in shell trade decreased and the site itself declined soon.

The characteristic of Takahashi shell mound as a relay point is that it played an economic role in the early stages of shell trade by processing and exporting shells and roughly processed products

---



---

materials that arrived from Okinawa for two consumption areas.

Key words: Takahashi shell mound, Relay Point, Shell Trade, Strombus shells, Early Yayoi Period, Okinawa Islands, Shell Deposit